

社会的インパクト評価の推進に向けて

-社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の基本的概念と今後の対応策について-

平成28年3月

社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ



内閣府

1. はじめに

▶ なぜ社会的インパクト評価が必要なのか

- 現代社会における様々な背景の変化
- 金融危機をきっかけとした情勢の変化

- 2008年の金融危機以降、投資家等の意識が変化している。
- 社会性を企業価値として捉え、非財務情報を開示する流れも。

✓ 国際的な潮流

- 金融危機後の姿勢が変化。民間の知恵や技術のさらなる活用へ。

- 資金の出し手となる助成財団や投資家が、より成果を求めるように
- 非営利団体等との協働や、社会的インパクト投資の動きが加速

成果を「見える化」
する流れ

✓ 日本の現状

- 社会的課題が複雑化。財政的な制約が高まる。

- 急速な人口減少と高齢化等に伴い、社会的課題も多様化
- これまでの行政中心の対応では限界がある

民間の資源を
呼び込む必要性

社会的インパクト評価が、民間の公益活動の基盤（インフラ）
として定着することが不可欠となっている。

2. 社会的インパクト評価とは

▶ 短期・長期の変化を含め、当該事業や活動の結果として生じた社会的・環境的なアウトカムを、定量的・定性的に把握し、価値判断を加えること

- 目的 ① 説明責任を果たす
② 学び・改善

- ✓ 「評価」に対する誤解
 - ◎ 組織の成長や事業の改善などの「価値を引き出す」ものである
 - × 監査・査定されるもの、経営資源を費消するもの、ではない！

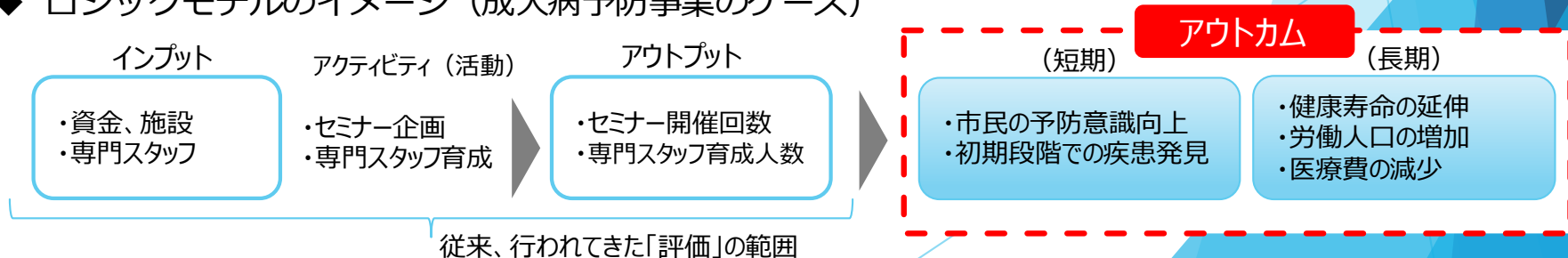
- 特徴 - アウトプット評価に留まらず、その先のアウトカムを評価する。

- ✓ サービス等の規模を示す「アウトプット」測定のみ行うものは、社会的インパクト評価ではない。
【アウトプット評価の例】「年4回のイベント開催を達成」、「参加人数が100人」等

- 「ロジックモデル」を活用し、アウトカムに至る論理的根拠を明らかにする。

- ✓ 設定した「活動・アウトプット」と「アウトカム」の間に、乖離や飛躍が生じていないかをチェック

◆ ロジックモデルのイメージ（成人病予防事業のケース）



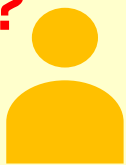
2. 社会的インパクト評価とは(続き)

▶ 活用と意義

- どのように社会的インパクト評価を活かしていくべきか？

✓ 「資源獲得・成長」の観点

目指す社会的インパクトの戦略や、結果を開示することで、さらなる資源を呼び込む。

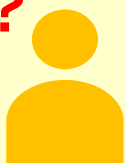


例えば・・・

- ✓ 資源提供者等とのコミュニケーションが深まり、人材や資金等を呼び込む。
- ✓ 投入資源と社会的インパクトの関係を明確にし、有効性に関する根拠に。
- ✓ 自らが目指す社会的価値についてのメッセージの発信・PRが可能に。

✓ 「経営管理・意思決定」の観点

生み出すインパクトを最大化すべく、事業の改善や資源配分の意思決定に用いる。



例えば・・・

- ✓ 事業の検証を通じて、人材・資金の配置や配分を改善する。
- ✓ 進捗や課題を把握することで、活動内容や目標を見直すきっかけに。
- ✓ 目標が共有されて活動に対する理解が深まり、関係者間の信頼向上に。

3. 評価の方法

- ✓ 評価手法によって、厳格性や必要なコストは様々なので、評価の目的や、ニーズに応じて選択する。
- ✓ 必ずしも貨幣換算が前提ではない。

▶ 基本的な考え方(評価の原則)

「重要性」 - ステークホルダーの意思決定に関わるような情報を出すことを重視する

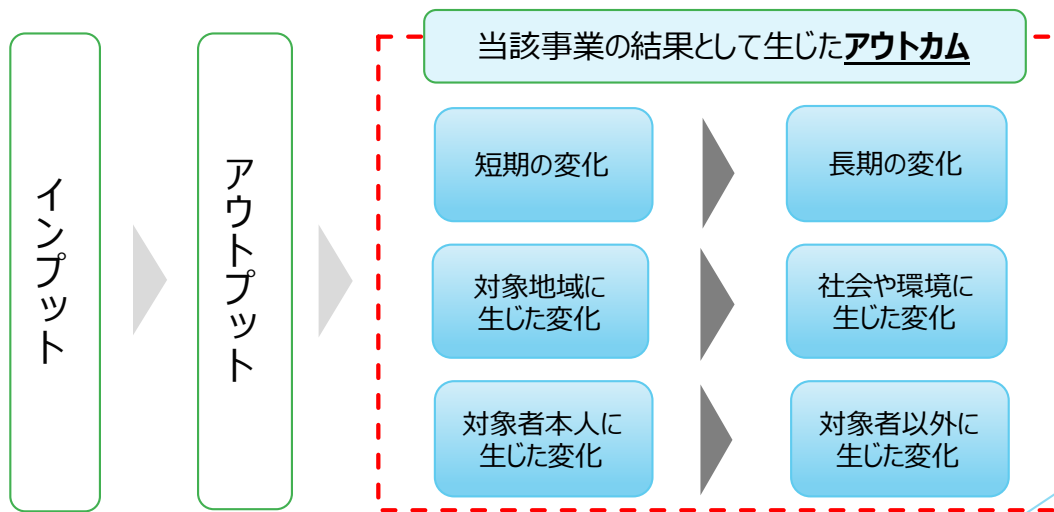
「比例性」 - 実施目的、組織の規模、資源(ヒト・カネ等)に合わせた設計を行う

※ 他にも、「比較可能性」、「利害関係者の参加・協働」、「透明性」等の原則がある。

▶ どこまでを評価の対象とするか(評価の範囲)

-アウトカム(短期/長期)やステークホルダー等について、範囲を決める

◆ アウトカムの範囲のイメージ



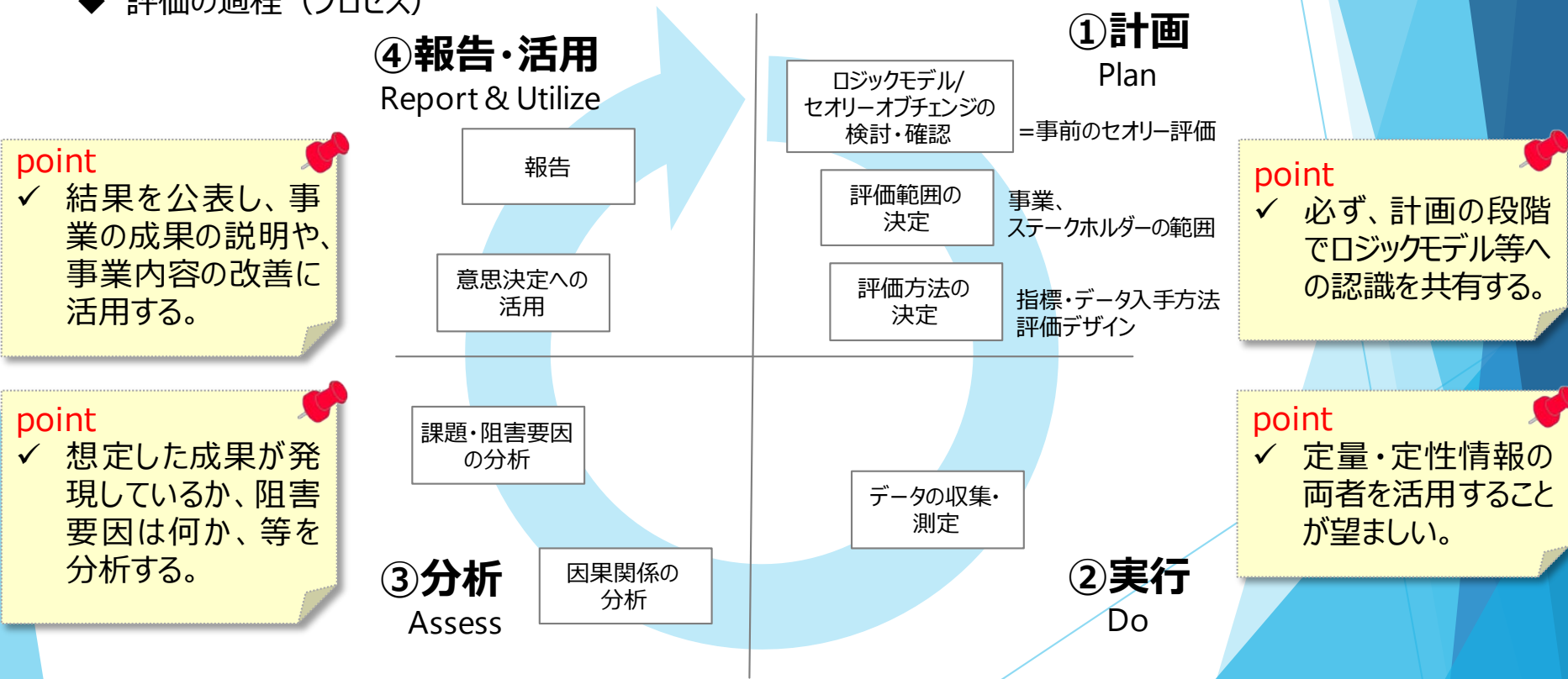
- ✓ 把握しようとするアウトカムが、長期・広範になるほど、困難度は増加する。
- ✓ 評価の目的や外部からのニーズ、組織が有する資源等を踏まえ、どこまでを評価の対象とするか検討する。

3. 評価の方法（続き）

▶ どのような手順を経るのか（評価の過程）

- 大きく分けて、4つのステップから構成される

◆ 評価の過程（プロセス）



point
✓ 結果を公表し、事業の成果の説明や、事業内容の改善に活用する。

point
✓ 想定した成果が発現しているか、阻害要因は何か、等を分析する。

point
✓ 必ず、計画の段階でロジックモデル等への認識を共有する。

point
✓ 定量・定性情報の両者を活用することが望ましい。

4. 評価の報告・開示

ステークホルダーによる事業の理解や、信頼性の判断に必要な情報を開示することが望ましい。

例えば・・・

- ✓ 組織・事業の概要、関連する利害関係者、ロジックモデル
- ✓ 評価対象とする事業の範囲、利害関係者及びアウトカム、その選定理由
- ✓ 評価の方法（評価手法、アウトカム指標、データ収集方法）、その選定理由
- ✓ 評価の結果（アウトカムの根拠、アウトカムの分析結果、分析の限界）
- ✓ 評価結果の意思決定への活用 等

- ✓ **「Comply or Explain」**（原則を実施するか、実施しない場合はその理由を説明するか）

比例性の原則を踏まえれば、すべての社会的事業体があらゆる重要情報を獲得し報告することはできない。実際、要求される情報やデータを利用できなかつたり、時には粗い推計が行われることもある。しかし、これらの限界は報告書において言及され、掲載されるべきである、というもの

5. 社会的インパクト評価を実施して

～評価実践者の声～

Q.1 どのような活動をしていますか？

食品トレイのリサイクル製造を行う「エプコ」という会社に投資をしています。彼らの特徴は、他者にはない優れた技術のみならず、障害者雇用率が非常に高く、さらに障害者が業務のメイン部署を担当しています。



様々な課題を持つ若者への自立就労支援サービスを提供している団体です。利用者の若者はそれぞれが個別の経験や家庭環境、特性などをもち、就労に困難を感じています。



日本財団と共同で運営する日本ベンチャー・フィナンソロピー基金を通じて、ベンチャー・フィナンソロピー事業を行っています。



Q.2 どのように評価に取り組みましたか？

投資先の障害者雇用の成果を「見える化」するために、社会的インパクト評価を実施しました。そして、顧客への成果報告として、総会等で発表しました。また、同社の株主として、このような活動を推進してほしいとのメッセージを発信しています。

利用者のステータスから「就職困難度」の点数化にチャレンジし、その点数によって効果的な支援方法があるという結果を社内で共有しました。個々の相談員の経験に裏付けされていたものに数字的な根拠が加わったことで、利用者に対してより具体的な支援ができるようになったと感じています。社会的インパクト評価が「学び」となり、事業改善につながったと思います。

支援先と一緒に事業計画を策定する中で、ロジックモデル等のフレームワークを使用しながら社会的インパクト測定のためのKPI設定を行います。社会的インパクトを可視化することのメリットは、成果が明確化されるだけでなく、ロジックモデルやKPI策定といった作業を通して、中期的に目指すステップが明確化されることが挙げられます。

6. 普及に向けた課題と対応策

✓ 課題

- 意義や必要性に対する理解の不足
- 手法に対する理解の不足
- 標準的な手法や指標、手段（ツール）の不足
- 土台となる用語の定義や海外文献の日本語訳などの、基礎的な情報の未整備、資料の不足
- 評価人材の不足
- 評価コストの負担や支援の在り方

✓ 対応策（着手すべき主な取組）

- インパクト評価普及を目的としたシンポジウムの開催と評価推進に関するフォーラムの立上げ
 - ・6月、民間主体の「社会的インパクト評価イニシアチブ」を設立
- 関係者による「評価宣言」と「ロードマップ」の作成
 - ・秋頃、「社会的インパクト評価イニシアチブ」においてロードマップ発表
- 評価に関する用語の邦訳と定義の明確化
 - ・研究者を中心に、関連用語について検討
- 日本語による「ロジックモデル」や「変化の理論」等の基本ツールの手引書の整備
 - ・6月、「社会的インパクト評価イニシアチブ」にて、ツールセットを発表
- 海外の先行文献のリスト化と主要文献の邦訳化
 - ・「社会的インパクト評価イニシアチブ」で、評価ツールや情報を集約するリソースセンター(webサイト)を運営
- 評価の担い手の育成を目的とした講習会とモデル事業の実施
 - ・全国各地でセミナー等を開催(社会的価値「見える化」プログラム、成果志向の補助・助成金推進会議 in あいち等)
- 評価事例（ベスト・プラクティス）の蓄積とピア・レビューの実施による知識の共有化
 - ・内閣府において、社会的インパクト評価実践のモデル事業を実施

※ 赤字部分は、平成28年5月時点の取組状況や予定を記載したものである。

(参考)社会的インパクト評価ワーキング・グループについて

- 社会的インパクト評価の普及の第一歩を進めるため、経済財政政策担当大臣が主催する「共助社会づくり懇談会」の下で「社会的インパクト評価検討WG」を開催し、有識者に参画いただき、社会的インパクト評価の概念整理や普及を図る上での課題の整理、内外の取組事例の整理等を取りまとめる。
- また、その成果を広くPRし、我が国の非営利組織や営利組織、資金提供者、資金仲介者など各ステークホルダーによる社会的インパクト評価実践の機運を高めるとともに評価手法の開発等を図る上での検討材料を提供する。

社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ構成員

伊藤 健 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 特任助教

源 由理子 明治大学公共政策大学院 ガバナンス研究科 教授

馬場 英朗 関西大学 商学部 准教授

今田 克司 (一財)CSOネットワーク 代表理事

岸本 幸子 (公財)パブリックリソース財団 専務理事・事務局長

水谷 衣里 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) ソーシャルエコノミー研究センター 副主任研究員

岡本 拓也 (特活)ソーシャルベンチャー・パートナーズ東京 代表理事

長満 崇 日本政策金融公庫 国民生活事業本部 融資企画部 融資企画グループリーダー

中川 剛之 (公財)三菱商事復興支援財団 事業推進チームリーダー

木村 真樹 (公財)あいちコミュニティ財団 代表理事、コミュニティ・ユース・バンクmomo 代表理事